

調査報告

子牛の呼吸器疾患の診断、治療、予防に関する全国アンケート

佐藤礼一郎

家畜感染症学会事務局

麻布大学 獣医学部

(〒 252-5201 神奈川県相模原市中央区淵野辺 1-17-71)

TEL・FAX：042-769-1645

e-mail：r-sato@azabu-u.ac.jp

子牛の呼吸器疾患（以下、呼吸器疾患）は成牛に比べ病態の進行が速く、死廃による直接的な損失に加え、発育不良や飼料効率の低下に伴う肉質の低下や繁殖への供用遅延といった間接的な損失も大きい。生産現場では下痢症とともに経済的被害の大きな疾病と位置付けられている。

国内の乳用・肉用牛の飼養戸数は年々減少傾向にある一方、一戸当りの飼養頭数は増加傾向にある。面白いことに呼吸器疾患の発生事故件数も年々増加傾向にあり、一戸当りの飼養頭数と同調する傾向がある。

呼吸器疾患はウイルスや細菌、真菌、マイコプラズマなど様々な病原微生物が原因となるが、単独の病原微生物よりもウイルスや細菌、マイコプラズマ等の複数の病原微生物による混合感染の場合が多く、それらが相加的・相乗的に病態を悪化させている。

呼吸器疾患の発症に病原微生物が関与していることは疑うまでもないが、それ以外に離乳や輸送、換気といった環境要因と生体の防御機能

といった3要因が相互に複雑に絡み合って発症することから牛呼吸器病症候群（BRDC：Bovine Respiratory Disease Complex）とも呼ばれている。原因が様々なため、制御するには原因となる病原微生物、環境要因、生体の3者を的確に捉え、適当な飼養管理や治療、予防を講じる必要がある。

最近では、より正確に病態を把握するためにX線検査だけでなく超音波検査を用いた方法も検討されつつある。

本疾病は、多くの臨床獣医師が生産現場で遭遇するが、診断および治療方針の現状についての情報は十分とは言えない。しかしながら、2011年度に行われた本学会アンケート事業によって、全国の臨床獣医師の協力のもと「子牛の呼吸器疾患の診断、治療、予防に関する全国アンケート（本学会誌1巻2号掲載）」が実施され、全国の子牛における呼吸器疾患の診断や治療、予防の縮図を示すことができた。今回は、その際得られた情報を基に集計を行った結果、さらに詳細な情報が得られたので報告する。